

人々に特別な目で見られること苦しみとぞしみじみと言う 浅野 稔

今月のこの作者の一連は、精神科医としての仕事にかかわる作である。殺害された女子高生の父親を診断するという体験を作品化。もちろんブライバシーの問題もあって、細部は伏せられているが、輪郭だけでも充分インパクトがある。

裏漣しの夕陽の照らす人影が外階段をゆっくり下る 西村すみこ

「裏漣しの夕陽の照らす人影」という表現に注目した。工事現場で働く人の歌が並んでいる後にあるので、網とか細かい格子ごしの夕陽にてらされているだろう、そう理解した。なかなか工夫された表現と思う。

会員はきつと慣れてる別府地獄組合員であるといふこと 木場陽子

「地獄組合の組合員なんて、あり？」という冗談のような本当の話。「血の池地獄」とか「竜巻地獄」とか、さまざまな見所のある別府温泉。ネットで見ると別府では温泉のことを地獄と呼ぶらしい。だから別府温泉組合の組合員は別府地獄組合員と呼ばれ、それが当たり前になっている、というのだ。取材感覚のユニークさに感心した。

補聴器を外していまは音のなき陸上競技中の顔つき 山本 絳人

ろう学校の教員として、耳が聞こえない陸上競技部の生徒をうたう作。手話やろう学校の生徒など、これまで

ほとんど短歌に詠まれなかった題材なので、作者はずいぶん苦心しておられるようだ。どうしても解説しないと読者は分からない。解説しては短歌として、つまらないものになってしまう。今月のこの作者の一首目と二首目に苦心の跡を見る。

缶ビール3本めを開けプースター接酒となして夏を終えたり 武富純一

「プースター接種」という流行語を、「プースター接酒」に置き換えてみせた作。新型コロナウイルス接種が完了した後に、三回目のワクチン接種を行うことで、追加で免疫を得るための接種が「プースター接種」と言われている。「缶ビール3本め」はもちろん三回目を意識していること。

十人の受講生と共に楽しみ「免疫力アップのツボ押し」講座 沢田昌子

作者を入れて十一人が、わいわい騒いでいる楽しそうな声が聞こえるような一首。指でツボを押し合ったり、くすぐったくて笑う笑い声がストレッチに想像されるからだろう。作者は一受講生なのか、講座の講師なのか、どちらとも読める

右ひざで身体を支え準急の顔を下から撮る男あり 細溝洋子

「撮り鉄」という言葉があって、異常とも奇妙とも思わないが、あらためてこうして男の動作を細部までクローズアップすると、なかなかユニークである。目的に邁進する無心の人間の動作。